歴史・文化サイトカード

通しNo.	2-D-1	更新日	2025/2/10
サイト名	島根半島の成立を語る～『出雲国風土記（いずものくにふどき）』の国引き神話		

基本情報	区分	□有形　□無形　☑その他	地図
	所在地		
	指定別		
	種別		
	指定／登録年月日		
	管理団体／モニタリング		
	周辺施設／アクセス	□トイレ　□売店　□飲食店　□駐車場（　　台）	
	留意点		
サイトの解説	歴史・文化	713年の奈良時代に、時の政府は全国に地方の地名の由来、特産物、古老の伝承などを調査し、報告するように命じた。『出雲国風土記』は733年に完成し、聖武天皇に奏上されたといわれている。当時は全国60余りの国すべてについて風土記がつくられたはずだが、現在まで残っているのは『出雲国風土記』のほか、『常陸（ひたち）国風土記』（茨城県）、『播磨（はりま）国風土記』（兵庫県）、『肥前（ひぜん）国風土記』（佐賀県、長崎県）、『豊後（ぶんご）国風土記』（大分県）の5つだけとなっている。これらの風土記は長い間に、大半のものが部分的に散脱しており、ほぼ完本として伝わっているのは『出雲国風土記』だけである。もちろん奈良時代当時の出雲国風土記がそのまま残っているわけではなく、後の時代に手書きで写した写本として伝わっているのである。 『出雲国風土記』の最初、「意宇郡（おうぐん）」の冒頭に、出雲国の成り立ちが書かれている。いわゆる「国引き神話」である。これは、『古事記』や『日本書紀』には書かれていない出雲独自の神話である。「八束水臣津野命（やつかみずおみつぬのみこと）」が国をつくるのに、出雲国は小さすぎるので各地から引いてきて継ぎ合わせたと記されている。継ぎ足されたところは島根半島の部分である。 東端の「三穂（みほ）の埼」は北陸から、西端の「支豆支の御埼（きづきのみさき）」は朝鮮半島の新羅から、その間の「闇見（くらみ）の国」と「狭田（さだ）の国」はそれぞれ「北門（きたど）の良波（よなみ）国」、「北門の佐伎（さき）国」から引いてきたとされている。国を引っ張った綱が「薗の長浜」と「弓ヶ浜」で、綱を結んだ杭が「三瓶山」と「大山」であった。	
	地形・地質、生物・生態等	神話の舞台である島根半島は、宍道褶曲帯と呼ばれる大規模な地殻変動が起こったことを示す地質構造で、『出雲国風土記』では引き寄せた陸塊がつなぎ合わさった場所を折絶（おりたえ）と呼び、その場所は地殻変動でできた大規模な断層や褶曲の起こった場所、岩石の種類が異なった地層の境界部分に相当している。また、『出雲国風土記』で神様が陸塊を網で引く様子は、約4,400万年前から約1,700万年前の大陸から日本列島が分裂する地球科学のプレート運動に似ている。	
写真・図等		
参考文献			